

---

# 神殺しと翼を持つ者

夜魘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神殺しと翼を持つ者

### 【Nコード】

N8244U

### 【作者名】

夜魘

### 【あらすじ】

本来存在しない異物が含まれているこの世界がどういつぶつに進んでいくのか誰にもわからない。

## 人物紹介

本名・・・ライ  
容姿・・・灰  
色の瞳  
灰色の髪  
長さは首ぐらい  
顔は上の中  
性格・・・頼まれると断  
れないお人よ  
しな性格  
権能・・・天翔ける翼  
(スカイウイング)  
炎や水、雷などの  
自  
らの周りにある  
自然の力を自らの  
翼とし、力とし  
て  
操る。神の権能で  
も可能。  
使用神器・  
・・・手甲  
経歴約1200年代の貧  
しい家に生まれ幼い頃に棄てられ過酷な生活を暮らしていた。  
17歳ぐらいからとある魔術結社による『人工  
神創造実験』の被験者となり非人道的な実験により数多くの被験者  
が死ぬ中で唯一の成功した個体となる。しかし力を使いこの実験に  
関わった全て消滅させた。力のせいなのか不明だが不老となる。  
1000〜2000年間はまつろわぬ神を殺し  
ていた。  
しかし神の権能を奪う事はできなかった。  
以降は仮死状態で人に見つからず眠っていた。  
現在より  
約10年前に目覚め普通の一般人として暮らしている。  
まつ  
ろわぬ神からは『呪われた異物』と呼ばれている。

## 人物紹介（後書き）

どーも初投稿です。  
と嬉しいです。

次からは話が始まります。読んでくれる

## 始まりは（前書き）

千夜さん感想ありがとうございます。読んでくれたことに感謝です。  
それではどうぞ読んでみてくださいください。

## 始まりは

【十九世紀イタリアの魔術師アルベルト・リガノの著書『魔王』より抜粋】>br<・・・この恐るべき偉業を成し遂げた彼らに、私は『カンピオーネ』の称号を与えたい。読者諸賢のなかには、この呼称を大仰なものだと眉をひそめる方がいるかもしれない。あるいは、私の記録を誇張したものとみなす方もいるかもしれない。だが、重ねて強調させていただく。>br<カンピオーネは覇者である。>br<天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる至高の力を奪い取るが故に。>br<カンピオーネは王者である。>br<神より篡奪した権能を振りかざし、地上の何人からも支配され得ないが故に。>br<カンピオーネは魔王である。>br<地上に生きる全ての人類が、彼らに抗うほどの力を所持できないが故に！>br<【二十世紀初頭、枢機卿アントニオ・テベスが教皇庁に宛てた書簡より抜粋】>br<神に背を向け、悪魔の知識を弄ぶ魔導師どもに『王』と崇められる存在がございます。おそらく、皆様も彼奴らの称号を一度は耳にしたことがありでしょう。>br<カンピオーネ。エピメテウスの落とし子。魔王。極めて遺憾ながら、この者たちに抗う術を我ら人類は持ちません。彼奴らと互角に戦い得るのは、同等のカンピオーネか父なる神に使える天使たち、または忌まわしき異教の神々もしくはもはや夢物語と化している過去にとある魔術結社が行ったという『人工神創造実験』の唯一の成功したという個体だけでしょう。>br<>br<ライside>br<>br<これが今のカンピオーネに対する考え方か。しかしあの実験は夢物語扱いか。まあ関係するもの全て消したから当たり前か。カンピオーネに関する資料をバレないように手に入れるのは疲れるな。さてとニュースはどうなってるかな？>br<「つい先日ローマで世界遺産であるコロッセウムで爆破テロが発生しました。コロッセウムはもう四分の一しか残っておらず犯人は今だ判明していません。

「>br<変わった事をする奴もいたもんだな。ローマも散々だな。そついや護堂がたしかローマに行つてたつげ。どうせカンピオーネ関係だろつけど。まあ大丈夫だろう。>br<>br<数日後>br<>br<今は学校帰りに商店街で買い物をして帰ろうと思つたんだが>br<「仲がいいな、あの兄妹は。商店街の真ん中で兄妹ゲンカとは。」「いい加減周りの視線が集まつてきてるし話かけるか。>br<「何やつてるこんな商店街の真ん中で。」「>br<「あつライさん。」「>br<「あつ神鳴先輩。何でしょうか……。」「>br<「気付いたみたいだね、周りの視線に。>br<「仲がいいのはわかるけど家やつたほうがいいと思うよ。」「>br<「あついえこれは兄が嘘をつくので質問してただけで。」「>br<「護堂を心配してでしょ？多分月曜日学校を休んだことについて。護堂も余り妹さんに心配かけないようにしなよ。」「>br<「うっ」「>br<「凶星をつかれたみたいだね。本当に似た者同士だね。さすが兄妹。>br<「まあきよつけて帰りなよ。」「>br<「はい、それじゃライさんまた明日。」「>br<「はい、さようなら神鳴先輩。」「>br<さうして今日の晩御飯何にしようか？

## 始まりは（後書き）

次回はアテナとの邂逅です。主人公戦いませんが……。

## アテナとの邂逅（前書き）

こんな文章をみてくれてありがとうございます。

## アテナとの邂逅

はあ、護堂はこの頃忙しそうだしどうしようか・・・>br<>br<ビクツ>br<>br<この感じはまさかいや間違いない>br<「ちつ何でまつろわぬ神がこんな場所にできた。」>br<多分護堂関係なんだろうけど。めんどくさいことに代わりはない。とりあえず様子見しようと思ったんだが、こつちの方向に向かつてやがる。護堂は何やってんだか。>br<>br<アテナside>br<>br<あの後彼奴はどうなったものか？ふとアテナは、先刻的一幕を思い出した。死の言霊で打ち倒したが、あのままおとなしく死んでくれただろうか。不可能を乗り越え、神すら殺めた人間の行き着く先が神殺し。魔王、ラークシャサ、デイモン、墮天使、混沌王、カンピオーネ。数多ある魔神の呼び名を冠されてきた神殺しの一員なれば、あるいは死すら克服して甦るやもしれぬ。その折りには、今度こそ武勇を以て打ち砕く。いずれにしても、神殺しを警戒する必要はもうないだろう。>br<>br<少し、遊んでみるか。>br<>br<アテナが本質を解き放つ。彼女が一步進みたびに、息を吐くたびに街から灯りがひとつずつ消えていく。ありとあらゆる人工の光が消失していく。偽りの陽光が、消えうせ、代わりに街を満たすのは真なる闇。たった数メートル先にあるものさえ見通せなくなる、夜の深淵。人々は困惑し、本能がもたらす怯えに苛まれ、回復しそうにない照明を恋い、不安に打ちふるえた。>br<>br<闇への恐怖。>br<>br<光を恋う強き想い。>br<>br<朝を待つ人間どもの不安と怯え、諦めと無気力。>br<>br<これぞ正しき夜の在り様。アテナは興にまかせて言霊を口ずさむ。>br<「アテナの真名において命ずる。闇よ来たれ、陽の恵みを追い散らせ。プロメテウスの火を掻き消すがいい。天の星々と黒き風よ、古の夜を躰しめよ。」>br<「謡いながら、アテナは歩む。>br<>br<raisid

e > b r < > b r < 「ちつ都市機能が完全にマヒしてやがる。一体  
どこの神様がでてきたんだ。」 > b r < んっどうやら来たみたいだ  
な。・・・まさかな「久しぶりだな、お前みたいな奴がこんな辺境  
の地にどうして来たんだ？アテナ。」 > b r < > b r < アテナ s i  
d e > b r < > b r < 「それはこちらのセリフだ！なぜ貴様がこの  
地にいる！また我を殺すためか！答えろ『呪われた異物』が！」 >  
b r < くつまさかあ奴がいるとは。まだゴルゴネイオンを手に入れ  
てないというのに！ > b r < > b r < 「いや、お前を殺す気はな  
い。」 > b r < > b r < 「ならばなぜ貴様は我を殺さぬ。一体何を  
考えている。」 > b r < > b r < 「俺が殺さなくても護堂が倒すだ  
ろうからな。それにまだバレたくないんでね。」 > b r < > b r <  
「倒すだと？東方の神殺しならば死の言霊を与えてやった。なのに  
我を倒すだと失笑だな。」 > b r < > b r < 「お前はあいつが倒し  
た神を知っているか？軍神ウルスラグナが持つ権能、その中のひと  
つ『雄羊』この権能は奇跡的な回復能力。それぐらいじゃ死なない  
さ。」 > b r < > b r < 「それにあいつ、護堂は面白い奴だ。一度  
戦ってみな、そしたらきつとわかるさ。それに俺は誰が来たのか知  
りたかったただけだからな。」 > b r < > b r < 「あなたがそこまで  
言うならもう一度戦ってみるのも一興か、まあいいあなたとも次に  
会った時は容赦しない。」 > b r < > b r < そして俺とアテナとの  
邂逅は終わったのだ。 > b r < > b r < ライ s i d e > b r < > b  
r < あれが剣の権能か、言霊を黄金の剣にかえ、神の肉体と神力を  
切り裂く剣。まさに神殺しの剣だな。次は白馬か夜をつかさどるア  
テナに対して天敵だがアテナもそれをわかつているはず。だからこ  
そ使っただろうけど。アテナ、闇の神力で防いだのはいいけどもう  
一つ自らを切り裂く剣を忘れていたお前の負けだ。 > b r < . . .  
どうやら倒したみたいだがやっぱり護堂は殺さないみたいだな。 >  
b r < > b r < 「フフツツハハハハハ。」 > b r < > b r < > b r < アテ  
ナの奴何笑っている？ > b r < > b r < 「あ奴の言う通りだ。かわ  
った神殺しだな、あなたは。」 > b r < > b r < なっあいつなんて

こと言ってくれるんだ。>br<>br<「アテナ一体どういうことだ。俺のことを誰かが言っていたんだ?」>br<>br<「残念ながらそれを言うことはできぬ。我はまだ死にたくないからな。では、また会おう草薙護堂。」>br<>br<あの野郎最後に置き土産を置いてってくれたな。>br<>br<数日後の月曜日>br<>br<はあつたくアテナめも言うだけ無駄か。んっあれは>br<「護堂!」>br<>br<「あつライさん。」>br<>br<「どうしたんだ?ものすごく疲れてるけど。」>br<>br<「アハハツまあ気にしないでください。」>br<>br<<「自分の身体は大切にしろよ。」>br<>br<「はい!」>br<>br<「後きよつけるよ。何か嫌な予感がすんだよ。」>br<>br<「わかりました。」>br<>br<学校にて>br<>br<「おい、聞いたか一年に美少女の留学生が来たらしいぜ。」>br<>br<「へえ、一体どんな奴なんだろうな。」>br<>br<「見に行こうぜ。」>br<>br<「わかったわかった」>br<>br<見に行った。そしてそこにあつたのはエリカと万里谷がいい争いをしており、護堂は周りの視線に耐えられず現実逃避をしており苦笑するしか俺にはできなかった。

平穩？な時間（前書き）

長くできたかな？

## 平穩？な時間

一ヶ月前、いつも通りに俺は護堂と一緒に弁当を食べようと思いつてみたのだが。そこにいたのはエリカと一緒に弁当を食べ、おびただし殺気で全身を貫かれている護堂だった。>br<>br<「一緒に弁当を食べようと思つて来たんだが、一体どういふ状況なんだこれは？」>br<>br<「あつライさん。」>br<>br<「あら、護堂の友達？」>br<>br<「いやっ先輩だよ。よく弁当と一緒に食いだな。」>br<>br<「へえ、私の名はエリカ・ブランドン。護堂とは将来を約束した仲よ。」>br<>br<「なっ！ライさんに嘘を教え、へえ、つまり護堂とは親友なんだ。なら一緒だな。」>br<>br<「へ？」>br<>br<「ちよつと違うわよ。将来を約束した仲つてことは結婚相手つてことよ。」>br<>br<「でも護堂は違つて目で見てるけど？」>br<>br<「護堂の奴目で信じないでくださいつてうったえかけてきている。」>br<>br<「護堂は照れているだけよ。そうでしょ、護堂？」>br<>br<「おお、護堂の顔が引き攣つてく。」>br<>br<「本当に結婚する時には呼んでよ。とりあえず弁当を食べよう。」>br<>br<「そうだ、はやく食べようぜ。」>br<>br<「なんか納得いかないけどしかたないわね。」>br<>br<「それがそう一ヶ月前の話。それ以降毎回とつていいほどエリカの魔の手から護堂を助けなければならず、しかも周りからみたらなぜか護堂の魔の手からエリカを助けているように見えるらしい。とりあえずこの教室に護堂の居場所が減つていられるだけは理解し、護堂に憐憫の目を向けたのは気のせいでは無いはずだ。」>br<>br<「そして現在俺の目の前にはいい争うエリカと万里谷、周りからのプレッシャーに耐えられず現実逃避をしている護堂。」>br<>br<「これはどういふ状況なんだ？」>br<>br<「男子

生徒A「酷い、もつとマシな名前を。これは男子が嫉妬して万里谷さんに止めてもらおうつてことで連れて来た結果、今の状況ができた。」>br<>br<「ああそう。護堂屋上で弁当食べようぜ。」>br<>br<「はい。」>br<>br<「一瞬で返事したな。」>br<>br<「そのいい争つてる二人も終わつたら一緒に弁当食べるなら屋上にこいよ。」>br<>br<「そして屋上にて話が終わった時には護堂の家に行くことが決まっていた。しかしエリカ護堂のことが好きなのはわかったが家族のことまで調べるのはやり過ぎだと思っぞ。だが、護堂の家に行くのは久しぶりだな。てっつか涙目で来てください、ていわれたら行くしかないし。やはり護堂が哀れに見えてしまう。護堂に幸せが来ることを願つておこつ。」>br<>br<「護堂家にて>br<>br<「先生に呼ばれたせいでちよつと遅れたな。護堂の奴大丈夫かな？おつ着いた着いた！」>br<>br<「ピーンポン！」>br<>br<「はい！どちらさまでしょうか？」>br<>br<「こんにちは静花さん、護堂居ますか？呼ばれたんだけどちよつと遅れて。」>br<>br<「あつはい。兄なら居ますけど。」>br<>br<「あつライさんこつちです。上がってください。」>br<>br<「なんだ護堂まるで人を救世主だ、みたいな目で今度は何がおきたんだ？」>br<>br<「簡単に結論を纏めると弁護は酷く難しかった。たしかに学校でのことは弁護できるが護堂が居ない時のことを知らないため弁護ができないのだ。まあこの二人と知り合ったのは十中八九カンピオーネ関係だろうけどそれはいうことはできないしどうしようもないのだ。学校でのことはちゃんと弁護できたし大丈夫かな？しかし何なんだ草薙一族は話を聞くと変わつてるとしか思えない。まあいいか、気にするだけ疲れるのは間違いない。だが、護堂のお祖父さんの手巻き寿司はとても美味しかったとここに書いておこつ。」

平穩？な時間（後書き）

次で東欧の魔王がやって来る！主人公が戦うかな？

最古の魔王との戦い（前書き）

文才が欲しいと嘆く今日この頃。

## 最古の魔王との戦い

その日俺はいつものように一緒に弁当を食べるために一年五組に来たのだが……。今度は何があつたんだ？どうせ護堂関係だろうけど。やっぱり護堂に平穩はないんだな。そしてすまない護堂、毎回巻き込まれるのは疲れるんだ！今回は一人で頑張ってくれ！>br<>br<助けてくれー！>br<>br<心の叫びが聞こえた気がしたが俺はその場を離れていった。>br<>br<>br<>br<>br<なんだろう、今日はなにかとついてない。傘を持ってないのに雨が降ってくるし、そして今、目の前にいるのはどうみても馬ほどでかい灰色狼が十頭ぐらいいるのだから。今日護堂を見捨てた罰にしては酷すぎる。今日は本当についてない。どーせカンピオーネの権能の狼だから殺しても怒られないだろう、問題は俺の存在を知られることだ。力を最低限にしてさっさと殺すか。>br<>br<>br<>br<我が名、ライの名において命ずる。我が周りに存在する大地よ、我が翼となり、我が敵を討ち滅ぼす力となれ！>br<>br<髪の色と瞳の色が茶色に染まり背中から一對の大地の翼が生え、その存在をしらしめる。>br<>br<手を地面にあて棘の形に隆起させ狼を全て串刺しにし、すぐに力を解除する。>br<>br<>br<「たくっ雑魚が。護堂の方は大丈夫だろうな？」>br<>br<>br<護堂の力をたよりに追いかけていたんだが、今度は十数体の死体かよ、趣味が悪すぎる。こんな権能を持つてるのは最古の魔王ウオバン公爵ぐらいしかしらねえな。護堂に早く追いつかなきゃな。>br<>br<>br<我が名、ライの名において命ずる。我が周りに存在する大地よ。我が翼となり、我が敵を討ち滅ぼす力となれ！>br<>br<>br<再び髪の色と瞳の色が茶色に染まり、背中に一對の翼を生やす。>br<>br<>br<狼の時のように地面に手をあて棘を生やすも数体しか巻き込まれない。狼より知能があるか……。それなら、一旦権能を解除し再び権能を使う。>br<>br<>br<>br<我

が名、ライの名において命ずる。我が周りに存在する風よ。我が翼となり、我が敵を討ち滅ぼす力となれ！」>br<>br<力を少し解放し、髪の色と瞳の色は薄い灰色となり、二対の風の翼が生える。>br<>br<「鎌鼬！」>br<手から風の刃をはなち数体を塵にし、残りは自らの体に風を纏わせ恐るべき速さで切り裂き塵に還す。>br<>br<「たくつ本当に数が多くてやってられないな。早く護堂に追いつかなければ！」>br<>br<>br<>br<>br<「護堂に迫る雷、護堂に当たる直前に割り込む。そして権能を使う。>br<>br<「我が名、ライの名において命ずる。我が周りに存在する雷よ。我が翼となり、我が敵を討ち滅ぼす力となれ！」

## ■最古の魔王との戦い（後書き）

次でヴォバンとの戦いは終わりです。

## 最古の魔王との戦い（終）

>br<>br<一瞬の閃光の後>br<>br<そこにいたのは金色の髪と瞳をし、三対の雷の翼を持った無傷のライと護堂がそこにいた。>br<>br<>br<>br<ライside>br<>br<「大丈夫か、護堂？」>br<>br<「なっ何でライさんがここに。それにその力は一体？」>br<>br<「残念ながらそれを教えることできない。知りたかったら自分で調べな。それにいつまでも待つてくれる訳じゃなさそうだし。」>br<こつちを睨んでるからな、魔王さんが。>br<>br<「貴様一体何者だ！我が力を防いだのだ、ただ者ではなからう。」>br<>br<「お前に教える理由がない。それに敵に自分から情報を渡すようなことはする気はない。知りたかったら自分で調べな。」>br<>br<「しかし本当に貴様は何者だ？カンピオーネでは無い、まつろわぬ神に似ている。」>br<>br<「何でそんなことがわかるのやら。倒して聞けばいいだろう。」>br<>br<「それもそうか、貴様を倒して聞けばいいだけだな。」>br<>br<「倒されるのはお前だよ。俺の大事な後輩を殺そうとしたんだ、覚悟はできてるだろ。」>br<さあつ戦いを始めよう！>br<>br<エリカside>br<>br<目の前で繰り広げられる戦いに私は呆然と見上げることしかできなかつた。>br<>br<「エリカ、ヴォバン侯と渡り合っているあの青年は一体何者なんだ！あんな存在聞いていないぞ！」>br<>br<「リイが聞いているけどそんなの私を知りたいわよ！ライ一体何者なの、万里谷ですら気付かないなんて！」>br<>br<「ライside>br<>br<ちつ目覚めて以来久しぶりぶりに使うから体力の消耗が激しいな。護堂に手伝って貰うか。」>br<>br<「護堂、今何か使えるものあるか？」>br<>br<「あっはい。」>br<>br<「なら俺があいつの隙をつくる。その瞬間に最

大出力で吹き飛ばせ。」>br<>br<「わかりました！」>br<>br<さて、護堂に言った手前頑張るとしますか。>br<あいつが放つ雷を避け、お返しとばかりに雷を打ち返す。あいつが雷を避けた瞬間に自らの手に雷を集めて雷の剣を造りだしおもしろきり振りかぶる。それを同じ様に避ける場所を先に推測し、雷で一瞬行動を止める見えないぐらいの網を張る。そしてあいつが何も知らずに引つ掛かり一瞬行動が止まったところで雷の剣を四つ造り手足を貫き動けないようにする。何か叫んでいるが無視し護堂に叫ぶ>br<>br<「今だ！」>br<>br<「はい！」>br<どうやら雷を操る権能みたいだな。いつのまにかヴォバンの雷雲の制御を奪ってたんだな。ヴォバンの奴塵なつてまで生きてるとはしぶといな。しかし俺は話に入らない。久しぶりに疲れた。力の練習を後でしとこう、このままじゃ危険だからな。んっ？>br<>br<「覚えておくがいい。我ら『王』同士は互いを無視しあうか、不戦の盟約を結ぶか、終生の敵と決めて戦い抜くか、いずれかだ。今より貴様は、我が敵の一人となる。そしてもう一人、貴様の力、正体暴いてみせる。貴様も我が敵の一人だ。」>br<それがヴォバンの残した言葉だった。>br<>br<「さあつ言いなさい！あの力は一体来やがった。」>br<>br<「自分で調べな。後、俺の何、何者なの。」>br<>br<「組織に言うなよ。対処するのがめんどくさい。」>br<>br<そういつて俺はその場から戦略的撤退をした。逃げたのではない。>br<>br<「三日後、昼休み、屋上にて>br<>br<「どうやらあいつらは俺のことを言っていないみたいだ、からいいんだが、正史編纂委員会にはばれたな。まだ後処理で忙しいんだろ。関わってきたら追い払うか。と考えると見ないようにしたが無理か。王様ポジションになんら疑問を持ってない護堂、新妻のようにつくす万里谷、この状況でも護堂の横にいるエリカ、そしてそれに対して怒る静香、それを傍観する俺。日常に為りつつある光景であった。よく懲りないなあいつら、それが俺の感想である。>

br<>br<>br<>br<>この日の放課後>br<>br<>ピリリリッ>br<んつ誰からだ?>br<>br<「はい、もしどちらさまでしようか?」>br<>br<「ライさん助けてください。」>br<>br<「どうしたんだ護堂、何があつた?」>br<>br<「エリカの奴が俺を婚前旅行に連れていこうと企んでるんです。じいちゃんも味方につけてるんです。夏休みの間何処かに隠れないと無理矢理に拉致されて連れていくかもしれない!何処か、良い当てがありませんか?」>br<>br<「ならっヨーロッパ方面行くからついて来るか?」>br<>br<「俺の故郷に行くついでに廻ろうと思つてな。まっ考えの中に入れてあげればいいよ。」>br<>br<「はい、ありがとうございます。それでは。」>br<>br<「多分護堂は逃げられないだろうな」。なぜか確定事項として思い、護堂に幸せが来ることを願つた。あれっ?前も同じ様に願つた気がするけどまっいつか。

夏休みにナポリにて（前書き）

PV5000突破ありがとうございます。

## 夏休みにナポリにて

ライside>br<>br<夏休み、ヨーロッパのナポリに現在  
いる。この前護堂に言った通り自分の居た時代の故郷に纏わるもの  
を探しているのだが全くと言って言いほど見つからない。唯一見つ  
けたのは過去に母から貰った赤と青のクリスタルの首飾りのみ、し  
かもそれは自分が起きた時のために保管していたもののため実質収  
穫は無いに等しい。夜になってきたし海岸らへんで野宿でもするか  
>br<>br<>br<>br<ちよつと時間を遡ってナポリの  
旧市街に存在するディアナ・ミリートの本屋の中>br<>br<  
<リリアナside>br<>br<>br<「まあ、遠くから眺めている  
分には綺麗な街つてことですよ。内側に入ってしまうと、あちこ  
ちにゴミが捨ててあったり、落書きばかりだったり、いつも車が渋  
滞中だったり、やたらとスリが多くて物騒だったりで、お世辞にも  
住みやすい環境とは言えませんが。」>br<>br<「あらカレ  
ン、いくら本当のことでも住民を前にして言うのはどうかしら？」  
>br<>br<「申し訳ありません、ディアナおばさま。根が正  
直者ですので、つい本音が。」>br<>br<「お、おば！？今  
の聞いた、リリイ！？この娘つたら私のことをお、おば・・・だ  
なんて呼んで！何か言つてやつてちょうだい！」>br<>br<  
>br<>br<「カレン、ディアナのような・・・乙女にはもつとふさわしい呼  
び方があるはずぞ。」>br<>br<「リリアナさまは心にも  
ないことをおっしゃるとき、必ずあらぬ方を向いて、相手の目をこ  
覧になりませんか？・・・ちよつと今のように。それにさつき  
の間はなんですか。」>br<>br<「何ですって！？リリイ、  
あなたまさか」>br<>br<「そんなことはありません！  
根も葉も無いことを言うな、カレン！」>br<>br<「あら、  
この間も気にしてらしたじゃありませんか。ディアナさまは本当の  
ところおいくつになられるのだろうと。かなりの若作りだけど、最

近はさすがに目元の小じわが隠せなくなってきたとか何とか言つて。  
「>br<>br<」言つてない！そ、そこまで言わなかつたはずだぞ！」>br<>br<「ま、まあ。語るに落ちたわね、リリィッ。なんて酷い娘たちなの！」>br<>br<>br<>br<などと、そんな会話をしたあと、カンピオーネたるアンドレア卿サルバトール・ドニを迎えに行き、ヘライオンについて説明をしたのだが、その時の>br<>br<「これを根本で斬つてから手頃なサイズにまで細切れにしてさ、バッグにでも入れて僕が持ち歩く……ってのはダメかな？」>br<>br<「ヘライオンを斬る！？と、とても大切な神具なのですよ！？」>br<>br<>br<「それはいくら何でも乱暴です。」>br<ディアナが叫び、いつも冷静なカレンでさえ顔色を変えた。ヘライオンなどは欧州の魔女には神聖な神具なのだ。>br<>br<そんなことがあり警戒を決意するのだが。人間と魔王である。まともに戦つて止められるわけもなく、自分達の持つ選択肢のすくなさを嘆きたくなった。>br<>br<>br<イタリアの擁する『剣の王』はこの通り、何をしてかすかわからない爆弾のような男。>br<>br<>br<近所のバルカン半島に住む『侯爵』は、飢えた猛獣並に危険。>br<>br<>br<アメリカと中国の『王』たちとは疎遠すぎる。>br<>br<>br<イングランドの『黒王子』は、性格が悪い曲者ともつぱらの評判だ。>br<>br<>br<アレキサンドリアの『女王』は百年にも及ぶ隠棲のまつ最中。>br<>br<>br<たまたまイタリアにいるらしい日本の『王』……性格は比較的まともそうだし、すこしは見所のありそうな少年だが、女を見る目がない。やっぱりダメだ。>br<>br<>br<さういえばあの時もう一人いた彼は何者なんだろうか？『王』のようだが……。>br<>br<>br<>br<目の前でヘライオンを真つ二つにされ、拳げ句のはてに地下遺跡の崩落により、生き埋めになりかけたものの脱出し、海辺にでて自らの不幸を悲しむ時もなく、上を向けば竜が飛んでいる……。そしていつのまにか横にいるサルバトール共々竜が造り出した波に飲まれる。>br<な、何でわたしまでこんな目に！>



## ペルセウスとの邂逅（前書き）

PV7000ユニーク2000達成！！>br<>br<まだまだ  
未熟ですが読んでくれてありがとうございます。

## ペルセウスとの邂逅

> b r < > b r < ライ s i d e > b r < > b r < 「ハアツハアツ・  
・」 > b r < > b r < クツ 一体何だつていうんだ。一体俺が何をし  
た！寝ていたらいきなり津波に飲まれ、海に流されるってなんだ！  
> b r < んつ、この気配はまつろわぬ神か！そうか原因は貴様か！  
全身全霊をもつて潰してくれろ！首を洗って待っている！> b r <  
> b r < その頃の原因を作った張本人サルバトーレは恐怖を感じ笑  
っていた。> b r < 「いやーいつぶりだろう、僕が恐怖を感じたの  
は何か知らないが楽しみだ。」> b r < とか言っていた。> b r <  
> b r < > b r < > b r < リリアナ s i d e > b r < > b r < 海に  
飲まれたがどうやら竜が助けてくれたようだ・・・サルバトーレ  
の事を同時に思いだしたが大丈夫だろう。どうせ、何くわぬ顔でど  
こかの海岸に泳ぎつくだろう。そして> b r < 「いやー死ぬかと思  
ったよ。」> b r < なんて能天気と言うに決まっているのだ、絶対  
に。そう思いながら竜から降り立つと> b r < 稲妻が走った。稲妻  
は人の形をしており、そしてリリアナが見たなかで随一の美男子だ。  
しかし感じる事ができる。> b r < > b r < 『まつろわぬ神』>  
b r < > b r < 間違いない。> b r < 人の世に顕れる最大の災厄、  
狂える流浪の神。> b r < 偉大なる神力と神性の所有者。> b r <  
『王』サルバトーレは津波に飲まれて現在いない。戦える存在がい  
ない。そのためには自分で切り抜けなくてはならない。> b r < 「  
御身はいずれこの神であらせられますね？よろしければ、御名を賜り  
とうございます。お聞かせ願いますか？」> b r < > b r < 「よく  
ぞきいた、乙女よ。我が名、我が素性をいかに語るべきかとしてし  
悩みもしたが、やはりこう告げるのがよからう。我が名はペルセウ  
ス。以後、見知りおけ。」> b r < > b r < > b r < ライ  
s i d e > b r < > b r < さてとようやくたどりついたか。どうや  
らまつろわぬ神と竜、というか神獣だなが戦い始めるみたいだな。

んつあれは東京タワーで自分勝手を具現化した神殺しと戦ったときにいた奴じゃないか。なんか言ってるな>br<「ペルセウス神よ、おやめください！これなる竜はナポリのこの土地の精より生まれた神獣。不用意にお手討ちにされては、この地の靈気が死に絶えてしまふ恐れがございます。どうぞ、この場は刀をお納めくださいませ！」>br<>br<大変なことを聞いちゃまったなこれじゃ竜を殺せない。>br<>br<「それはできぬ相談だな、乙女よ。」>br<>br<「竜を殺め、蛇を屠るは我が宿業とも言える務め。これこそが私を英雄たらしめる偉業であり、行動でもある。その務めを途中で止めることは、何人にも許されぬのだよ。」>br<>br<「なつあいつ殺すつもりかよ！」>br<>br<「そ、そのためにこの土地がどうなってもかまわぬと!？」>br<>br<「我が武勲の成就のためだ。致し方あるまい。」>br<>br<「ふざけているのか！自分の武勲のためにこの街を犠牲にするだと!」>br<>br<「控えているがいい。乙女の役目は救いを待ち、勝者たる武士に愛を捧げること。戦の邪魔立てとは僭越に過ぎるぞ!」>br<>br<「その言葉によりリアナは動けなくなる。」>br<>br<「八八八、聞き分けのよい子だ。よければ竜を打ち倒したあとで、我が侍女として召し抱えてやろう。いにしえの我が妻、アンドロメダの故事に倣つてな!」>br<>br<「我が名、ライの名において命ずる。我が周りに存在する風よ、我が翼となりて我が敵を討ち滅ぼす力となれ。」>br<風を身につけ一瞬でペルセウスと竜の間に入り双方を風で縛りつける。>br<>br<「なつ貴様一体何者だ!」>br<>br<「うるせえよ。さつきから話を聞いてりやどこの暴君だ。竜を殺せばこの街がどうなるかわからない、なのに自分の武勲のためだとそれに彼女はお前の言霊で動けないだけだ。民衆のことを考えてない時点でお前は英雄でも何でもない、ただのはた迷惑な存在だ。」>br<>br<「呪われし異物』の分際で我を愚弄するか!」>br<>br<「ペルセウスがものすごい速さで斬り裂こうとする。それを風で感じとり攻撃

を読み、その腹に風を纏わせた拳を叩きこむ。> b r < ドゴオオオツ > b r < > b r < 「グハアツ!? 貴様殺してやる!」> b r < > b r < 「てめえはただ速いだけだ、それぐらいじゃ俺は殺せないぞ。」> b r < > b r < 「どうやら少し遅かったようだな。」> b r < > b r < 「んっ? この声はアテナか、どうりでどっかで感じた神力を感じるわけだ。護堂もいるんだろ? 今は手を離せないから見れないけど。」> b r < > b r < 風でペルセウスの動きを読んで避けている。しかし相手はまつろわぬ神であり、速さを武器としているため、少しでも動作が遅れると斬られる可能性があるからアテナや護堂を見れないのである。> b r < > b r < 「な、何でライさんがここにいるんですか?」> b r < > b r < 「ヨーロッパをまわると言っただろう。それでちょうどこの街に居て巻き込まれた訳だ。」> b r < > b r < 「くっ 貴様戦いの中で話すとは随分余裕だな!」> b r < > b r < 「とりあえずアテナその竜、神獣をさつさと片付けろ。お前のだろ?」> b r < > b r < 「あなたに言われるのは気分が悪くなるが仕方あるまい。 傷つき倒れた我が子よ、妾の胸に還り。その身を休めるがよい。」> b r < > b r < 「さてつなら後は護堂に任せる前に一撃お見舞いしますか。」> b r < > b r < 「えっ俺がやるんですか!?」> b r < > b r < 「我が身につどえ、おおいなる力よ。神を殺す為に生きるその存在を示せ。」> b r < > b r < 永遠の終 > b r < ( e t e r n a l e n d ) 「> b r < > b r < 放つ直前に翼を一对に変え、力を最小に抑え放つ。」> b r < > b r < ドゴオオオオン > b r < > b r < < 「へっボロボロだな。」> b r < > b r < > b r < そこにいるのは服などがボロボロで今にも崩れ落ちそうなペルセウスがいた。> b r < > b r < 「すげえ、さすがライさんだ!」> b r < > b r < 「これほどの力すごい。」> b r < > b r < 力使い過ぎたか……。元々力の扱い方を思い出すために使って少ない状態の上に海から陸にあがる時や、さっきまでの戦いで空になった。寝て休んだらすこし回復するんだがな。こんな時に力の回復が遅いのが泣けてくるぜ。力が特

別なんたるうけど。あつやばい意識が.....。

## 魔女達の会議（前書き）

誰か感想をください。

## 魔女達の会議

んっあれ此処は一体何処だ？確かペルセウスと戦って力を使いすぎて・・・倒れたんだっただな。取りあえず誰かいないか探してみるか、護堂とか何処かな？・・・>br<>br<>br<ライが起きる少し前>br<リリアナside>br<>br<草薙護堂が連絡をするために席を立つ。>br<>br<「さて、と・・・そろそろ今後の方針について会議をした方がよさそうですね。」「>br<三人だけとなりカレンが提案する。>br<「それはやはり、草薙護堂もおっしゃっていたように彼の連れを捜すのがいいだろう。日本の巫女の靈感は私達でも敵わないレベルだし、何よりルクレチア・ゾアの知恵を借りることができるのは大きい。」「>br<>br<「ええ。やっぱり私達よりもお歳を召されてる分、歳の功があるものね。」「>br<キャリアの差が具体的に何年ほどなのかデイアナにきくのは、やはりまずいだろうか。>br<>br<「でも、そうしますと『王』をお助けした功績は草薙さまの愛人方と、それを取り仕切るエリカさまのものとなります。そして、エリカさまは《赤銅黒十字》の大騎士です。」「>br<>br<「同じ場にながら無力だった《青銅黒十字》の面目は失われる、というわけか。」「>br<>br<「それはちよつと面目ないわよねー。」「>br<>br<「だが、今は『まつろわぬ神』の顕れた非常時。そのように些末なことを気にかけている場合ではないはずだ。わたしたちはわたしたちで最善を尽くせばいい。」「>br<>br<「その結果、力及ばにエリカたちの尽力で勝利できるならそれはそれでいいじゃないか。どちらにせよ『まつろわぬ神』を退け、ナポリが再び安全な街になるのだからな。・・・だが、そうならないように『王』達を全力でサポートする。あの連中が到着する前に、勝利していた。それでいいな？」「>br<>br<「リリアナさまなら必ず、そうおっしゃると思っております。では《青銅黒十字》の本部に

も、消息不明のエリカさまたちを捜索してくれと要請いたしましたしよ  
う。・・・でもあちらが来る前に『教授』の術を草薙さまにかけ  
て、既成事実を作っておくべきですね、念のため。」>br<>br<  
r<「え?」>br<>br<「もちろん、これはリリアナさまの  
お役目です。全力を尽くすとおっしゃったのですから、もちろん拒  
みませんよね?ご自分で宣言されたわけですし。」>br<>br<  
<「ええっ!?」>br<まさかっはめられた!>br<>br<  
「いや、ほら。彼も言っただろう、まだペルセウスの謎が解けて  
いないと!それに目を覚ましていないもう一人の『王』だっている  
し、つつ付き合っていたり、好きでもない人とキスすることはあつ  
ていいことじゃないはずだ!」>br<>br<「もちろん謎解き  
に皆で取り組んで、答えがでてからです。でも、そのあとの段取り  
を決めておかないと、スムーズに事は運びませんからね。それにも  
う一人の『王』が目覚めるのが遅かったら困るでしょう。」>br<  
>>br<「わたしじゃなくて、ディアナでもいいじゃないか!」  
>br<>br<「そ、そうね!。恥ずかしいけど、神様との戦い  
に必要なことなら・・・。」>br<>br<よし、早く此処から  
離れないと危ない。」>br<「そ、それじゃあわたしはもう一人の  
『王』の様子を見てく(ガッ)」「逃げちゃダメよりリイ。」・・・  
はい。」>br<>br<「そういえばさつきからちよつとだけだ  
けど別のことを考えていたでしょう?さあっ何か言いなさい!」>b  
r<>br<うつ気付かれてる!>br<「いえ、もう一人の『  
王』はどうだろうか、という心配しただけです。」>br<>br<  
<「もしかして、草薙さまではなくてもう一人の『王』の方が気に  
なっているんじゃない!」>br<>br<「ああっリリアナ様にもと  
うとう春が来たんですね。」>br<>br<「なっどっという意味  
だ!」>br<>br<「恋ですね!このカレン嬉しくて仕方あり  
ません。きつと運命です。」>br<>br<「こ、恋!?」>b  
r<>br<「それじゃ仕方無いわね。草薙さまとのキスはわたし  
がするしかないわね。」>br<>br<「な、ディアナまで。も

ういい！わ、わたしは少し休む。」>br<>br<>br<「脈ありね。」  
>br<>br<「そうみたいです。」>br<>br<>br<>br<  
<>br<これがライが眠っている間にあつた魔女達の会議である。

## 魔女達の会議（後書き）

勉強合宿（地獄）からわたしは帰って来た！。 >br<しかし宿題をするために更新が少し遅れるかもしれせん。 >br<これからも読んでくれると嬉しいです。

## リリアナの秘密？（前書き）

まだ宿題が終わってないのに投稿です。

## リリアナの秘密？

ライside>br<>br<ただいま散策中>br<>br<ん  
っ？あれは一体？視線の先には黒革の手帳。誰のかわからないので  
中を見てみる。>br<>br<『やめて、放して！わたし、あな  
たの事なんか大ッ嫌い！』>br<>br<『フツ。だったら何  
で俺のところに来た？わかつている。おまえは俺の事を  
』

>br<>br<『あついやッ　んんっ！？』>br<>br<  
<『もっおまえを放さない。俺のものになれ。』>br<>br<

放心状態

ハッ！？俺は

一体何を。そつと下に置き、記憶から抹消しようとする>br<  
>br<スツ>br<>br<背中冷たいものが突き付けられる。  
それを瞬時に理解し一瞬で手が切れないように刃物を抑え背後にま  
わる。>br<>br<『誰だ。』>br<>br<よくよ  
く見てみると銀色の髪、そして見た事ある後ろ姿。>br<>br<  
<『リリアナ・クラニチャール？』>br<>br<ビクッ！！>  
br<>br<当たっているみたいだな。。。>br<>br<  
「なぜこんな事を？」>br<>br<彼女がこんな事をする理由  
がな。。。い。。。まさか。>br<>br<『あ、あなたはわ  
たしの秘密を見てしまった！あなたを殺して、わたしも死にます！』  
>br<>br<『やっぱりこれか。。。』>br<>br<『落ち  
着け、まず俺を殺す事ができるのか？』>br<>br<『えつと  
！？』>br<>br<『。。。それにそんなことしたら大変な問  
題だぞ。』>br<>br<『あつ。』>br<>br<『先ず落  
ち着け。』>br<>br<『あれ？俺が落ち着いてない？』>br<>br<  
r<>br<『落ち着かせ中』>br<>br<『ああつ気  
いません。少し動揺してしまっ？』>br<>br<『ああつ気  
にしないでいいよ。驚いたけどね。まあ趣味に関しては人それぞれ  
だしね。誰にも言わないから。』>br<>br<『あつはい。』

> b r < > b r < > b r < > b r < > b r < 縮こまってかわいいな。 > b r  
< はっ俺は今何を！ > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < >  
b r < その頃護堂はまつろわぬアテナと会っていた。 > b r < > b  
r <

## ペルセウスとの戦い（始）（前書き）

学校が始まってしまいました。更新が遅くなりますが見捨てないで  
くれるとありがたいです。



<>br<来たみたいだな。>br<>br<「待っていたぜ。ペ  
ルセウス、戦いを始めようか!!」

## ペルセウスとの戦い（始）（後書き）

次でようやくペルセウスとの戦いです。 >br< ああ感想、文才  
どっちでもいいから欲しいです。 戦闘描写がもっとうまくなれたら  
いいな（泣）

## ヘルセウスとの戦い（終）（前書き）

ちよつと久しぶりな投稿です。原作が今手元に無いため更新が遅く、不定期になります。ご了承ください。



るだろう。ライさんはあれでも全盛期に比べるとだいぶ弱いらしい  
(アテナ談) > b r < ライさんはまるで流星のような速さのペルセ  
ウスの攻撃を手にとるように避けている。 > b r < しかしこれでは  
決着がつきそうにない。一体どうする気なんだろう? > b r < > b  
r < > b r < > b r < > b r < > b r < ライ s i d e > b r < > b  
r < 早く倒さないとまた力の使い過ぎで意識を失う可能性が高い。  
どうすれば . . . . . ! > b r < > b r < おし、  
ペルセウスお前の力とその性格、利用させてもらうぞ! > b r < >  
b r < > b r < > b r < まず最初に水を操り大量の蛇を形作る。そ  
うすれば > b r < > b r < 「ふつ蛇とは選択を誤ったか『呪われし  
異物』よ! . . . . . いにしえの武勲、我が刈り取りしゴ  
ルゴンの首にかけて答えよう。あらゆる蛇は、私の前で無力となる  
と。」 > b r < > b r < 「掛かった!」 > b r < 自分自身の蛇殺し  
の権能を使う。その瞬間、さつきと同じ様に大量の海の水をワイヤ  
ーのように圧縮する。違うのはその数、残っている力で大量に造り  
だす。そして権能を使ったその瞬間のペルセウスに覆いかぶせるよ  
うにするとシュレッダーにかけたかのようにペルセウスを切り裂い  
ていく。「くつグアアアア!」 > b r < > b r < 「お前の最期だ、  
ペルセウス。」 > b r < > b r < 永遠の終わり > b r < > b r  
< ( e t e n a l e n d ) 「 > b r < > b r < ドオオオオ  
オン > b r < > b r < 「終わったか?」 > b r < > b r < はあ、結  
構戦いの感覚や力の使い方が戻ってきたな。向こうに護堂やリリア  
ナの姿が見えるな。早く休まないと疲れた。 > b r < > b r < > b  
r < > b r < > b r < > b r < > b r < > b r < 何処かのナポリの  
路地裏 > b r < > b r < > b r < ここでは光の粒子が集まりやがて、ペルセ  
ウスとなる。 > b r < > b r < 「はあはあ、さすがといったところ  
か。しかしここで矛を収めるのはもつたいたないと言えよう。」 > b  
r < 残りの力は僅かだがもう一度戦いたくしょうがない。 > b r  
< > b r < 「いやー、そろそろ潮時だと僕は思うよ。プロレスだっ  
たら3カウント、ボクシングだったら10カウントがとつくに終わ

っている試合だからね。「>br<>br<」やあ、始めまして。  
僕の名はサルバトーレ・ドニ。あなたは多分、ペルセウスでいいん  
だよな?」「>br<>br<しかしその願いは叶わず、ドニによっ  
て倒された。>br<>br<>br<>br<>br<その頃ライはすぐ  
に休むことはできず倒れるまですつとりリアナの説教を受け続ける  
のであった。

やってくるのは・・・(前書き)

久しぶりの投稿です。>br<>br<待つてた人っているのかな  
.....

やって来るのは・・・

>br<>br<>br<>br<あのペルセウスとの戦いから時  
が経った。>br<>br<>br<>br<そして八月頃にリリ  
アナ・クラニチャールが護堂のクラスに留学してきた。そこまでは  
よかった・・・どうせ護堂の愛人の立場に魔術結社が送って  
きたのだとばかり思っていたのに・・・>br<>br<>  
br<>br<>br<>br<彼女は護堂ではなく、俺を追って  
来たのだ。俺の騎士になりたいらしいのだが・・・>br<  
>br<>br<>br<まあそれを置いといても彼女が俺の近く  
にくるということだ。俺としては好みのど真ん中なのだが美少女だ、  
つまり嫉妬に狂った集団が現れてもおかしくない。護堂がいい見本  
だ。>br<>br<>br<>br<そう思っていたのだが襲わ  
れることもなく安全に学校生活をおくれている。一体何故だろうか  
?>br<>br<>br<>br<しかし本人は知らない・・・  
・・・>br<>br<>br<過去に同じ様にアプローチした女子  
がいたがその好意を友達同士の好意と誤解したことがあったことを  
・・・>br<>br<>br<実はファンクラブがあり盟約  
に従わずにアプローチをした場合罰が下る為にアプローチする女子  
が少ないだけだということを・・・>br<>br<>br<  
<学校で『幻の美形』と呼ばれあいつならしょうがないと諦められ  
ていることを・・・>br<>br<>br<>br<知らぬは本人  
ばかりなり。>br<>br<>br<>br<>br<そんなこんなのお  
る日>br<>br<>br<>br<>br<いつものように昼飯を一緒  
に食べるために来たのだが>br<>br<>br<>br<「あれっ?エリカはど  
うしたんだ護堂。」>br<>br<>br<いつもなら護堂の隣にいろ  
ろう人物がいないのだ。そして護堂はどうして天を仰いでるんだ。  
どうせまた妹である静花に責められていたんだろ。どうすればい  
いのやら。>br<>br<>br<>br<>br<護堂のことは置いといて昼飯



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8244u/>

---

神殺しと翼を持つ者

2011年9月25日00時25分発行